

## 2018年7月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

500 hPa 高度をみると、極うずは平年と比べて強かった。北太平洋東部～北大西洋、ユーラシア大陸北部で波列パターンが見られた。ヨーロッパ北部、東アジア～カナダ東部の広い範囲で正偏差となった。200 hPa 風速をみると、寒帯前線ジェット気流は明瞭となった。東アジアでは、偏西風は平年の位置と比べて北寄り flowed。海面気圧をみると、ヨーロッパ北部～西シベリア、北太平洋～北米～北大西洋で正偏差、カスピ海付近で負偏差となった。太平洋高気圧は本州付近への張り出しが平年と比べて強かった。850 hPa 気温をみると、北米西岸周辺、カナダ東部、ヨーロッパ北部、カスピ海周辺、東アジア東部で高温偏差、北太平洋の日付変更線付近及び北大西洋の北緯30度帯周辺で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、フィリピン付近～北太平洋中部の北緯10～20度帯で活発、インド洋、東アジア東部～日本の東海上で不活発となった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の中旬頃にインドネシア東部付近を大きな振幅で東進した。対流圏上層では、東アジア北東部で高気圧性循環偏差となり、チベット高気圧の北東への張り出しが強く、日本付近を広く覆った。北太平洋熱帯域の中部～北大西洋熱帯域の広い範囲で低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、フィリピン付近～北太平洋中部の活発な

対流活動に対応して、南シナ海～フィリピンの東海上では深いモンスーントラフに関連した低気圧性循環偏差となり、そこから北～北東への波列パターンが明瞭となった。海面気圧は、アフリカ～インド洋では高気圧偏差、太平洋赤道域で低気圧偏差となった。南方振動指数は+0.2となった。

### 世界の天候

2018年7月の世界の月平均気温偏差は+0.31°C（速報値）で、1891年の統計開始以降、4番目に高い値となった。7月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.69°C/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

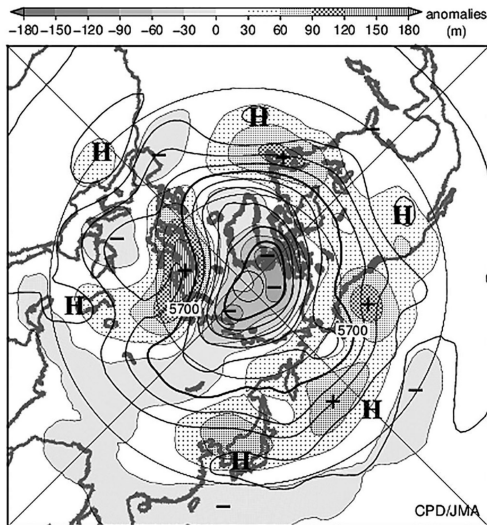
- 東日本～中国中部、中央アジア南部及びその周辺、ヨーロッパ北部～北アフリカ北西部、カナダ南西部～中米中部で異常高温となった。
- ヨーロッパ中部で異常少雨となった。

（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

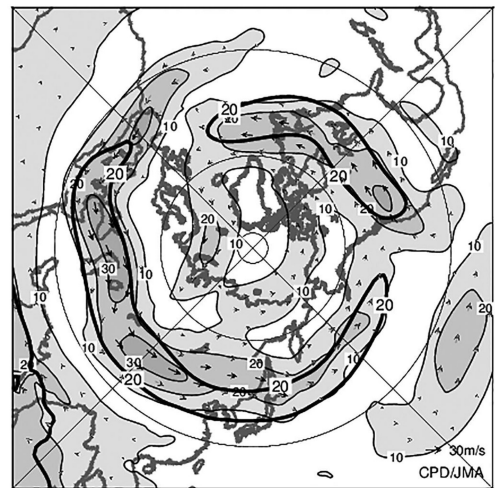
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ

「気候系監視速報」をご覧ください。

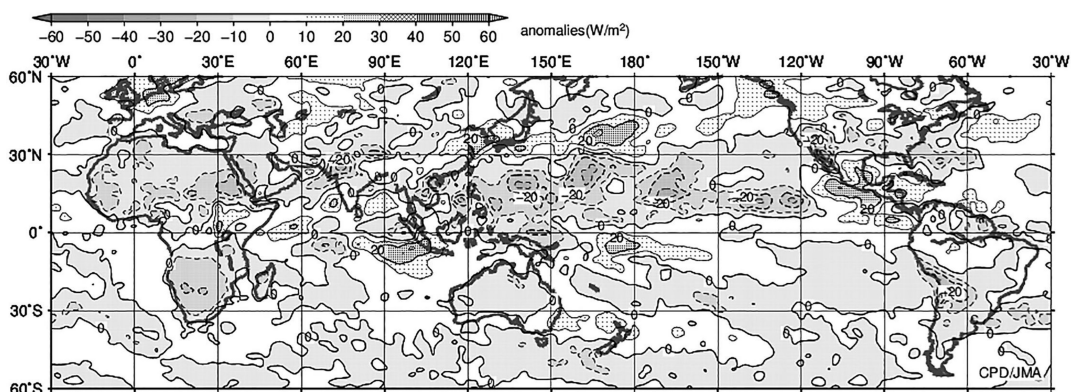
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



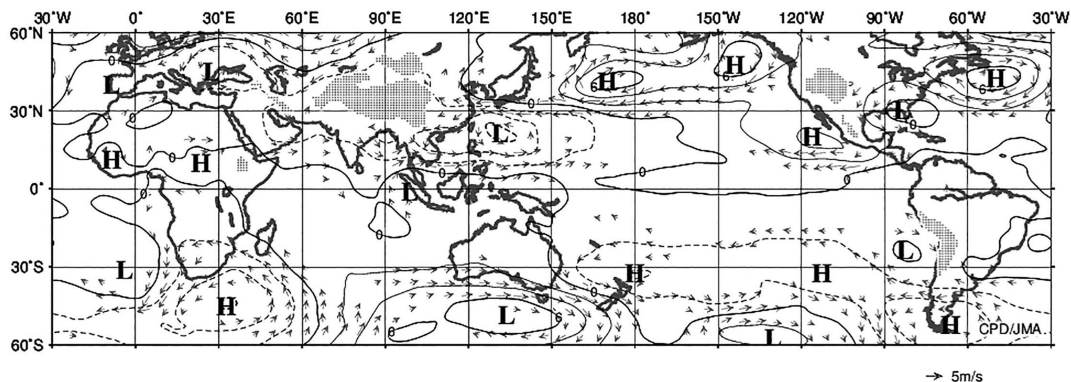
2018年7月の北半球月平均500 hPa 高度及び平年偏差  
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。



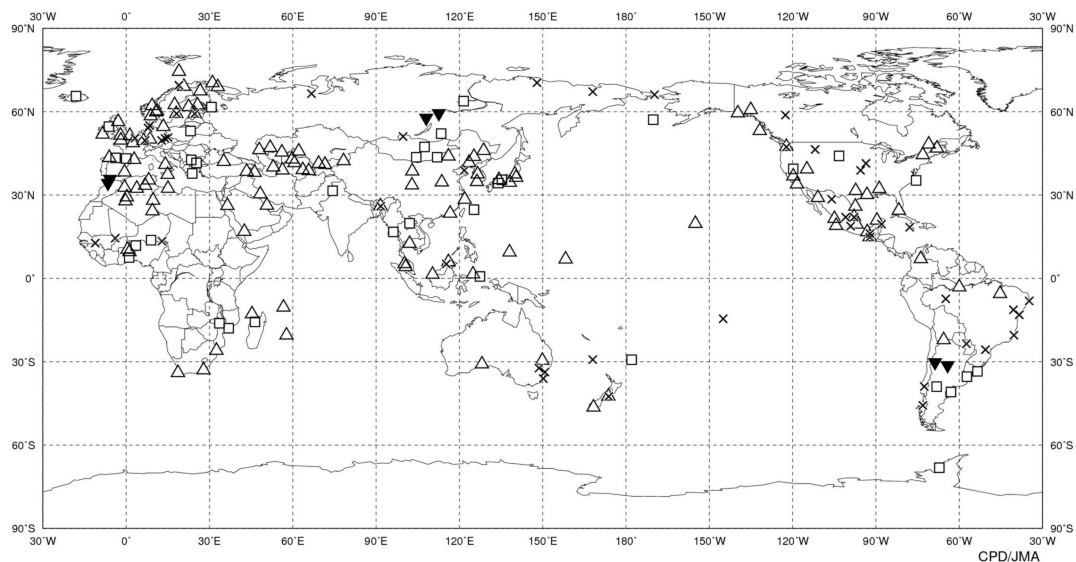
2018年7月の北半球月平均200 hPa 風速及び風ベクトル  
等値線間隔は10 m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は20 m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



2018年7月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。平年値は1981～2010年の平均値。



2018年7月の月平均850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。平年値は1981～2010年の平均値。



2018年7月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。